

## 清少納言、紫式部が生きた時代

東京女子大学教授 今井 久代

今年の大河ドラマの主人公が紫式部というところで、紫式部が生きた時代が、にわかには脚光を浴びている。ここでは、「さらざらましかば(注…冷泉天皇が誕生しなければ)この頃わづかに我らも諸大夫ばかりになり出でて、所々の御前・雑役につられ歩きなまし」(大鏡・師輔伝)という道長の言を手がかりに、紫式部たちが生きた世界などについて考えてみたい。『大鏡』の語り手の世継によれば、この言は、道長が源俊賢(安和の変で失脚した源高明男。道長の妾妻明子の兄として復権)に語った軽口だという。「諸大夫」とは、『源氏物語』の雨夜の品定めで言うところの「中の品」、極官が四位、五位、良くても太宰大式を務めて参議まで上る程度にとどまる階層を言う。彼らは官人として働く傍ら、摂関家など権力者の家司などを務める家人として親近し、その恩顧で受領を歴任して生涯を終える。冷泉天皇の誕生は天曆四(九五〇)年、道長の誕生は康保三(九六六)年から、父兼家などから伝え聞いた話でもあるの

帰趨に直結し、家を繁栄させてきたという明確な認識が興味深い。ここで少し気になるのが、「そうでなければ諸大夫になっていた」と考えた根拠、あるいは現実である。

保明親王(皇太子のまま薨去したので「前坊」と呼ばれた。六条御息所の夫の「前坊」のモデル)と朱雀天皇、村上天皇の生母は藤原時平・忠平兄弟の姉妹の穩子であるが、その後忠平の娘も、忠平の長男実頼の娘も親王を生むことなく、ようやく忠平の次男師輔(兼家の父)の娘安子が産んだのが冷泉である。その意味では、冷泉の誕生は、師輔の子孫(九条流)が実頼の子孫(小野宮流)を圧倒してゆく契機でもあったが、道長の存命時には、まだ小野宮流は「諸大夫」ほどには零落していない。実頼の孫で養嗣子となった実資は右大臣まで上り、実頼の次男頼忠は太政大臣、頼忠の子公任も大納言まで上った。ここで道長の念頭にあった「諸大夫」は、時平の子孫の方だったのではないか。

時平自身も含めてその血筋は短命の者が多く、時平のため失脚させられた菅原道真(昌泰の時平の祟りと言われた。なかでも保明親王の妃は時平の娘で慶頼王を産んだが、皇太子保明も、次に皇太孫となった慶頼王も、相次いで早世したのは衝撃的であった。珍しく長命で右大臣まで上った時平次男顯忠にしても、道長の祟りを恐れたのか、娘を朱雀や村上の後宮には入れなかつたので、当然、時平流から天皇が出ることはなかつた。その結果、時平流は顯忠の子孫に四位参議が一人出ただけで、時平の曾孫相如などは、兼家の三男道兼におもねる出雲前司として名を残したのだった。

兼家長男道隆が糖尿病で数え四十三歳の若さで薨去した後、関白を拜命したのは三男の右大臣道兼であるが(次男は『蜻蛉日記』の作者の産んだ道綱で、追い越された、この時道兼は相如の有する中川の邸に滞在していたという。道隆の死後に夢見や予兆があり、陰陽師の占断に従い、方違えしていたのである。「相如は」年ごろかうののしらせたまふ関白殿(注…道隆)にも参らで、ただこの殿をいみじきものに頼みきこえさせつる者(栄花・みはてぬゆめ)で、

父助信が愛した広壯で興趣ある中川の邸を「殿の御方違所」と言ひ思ひたりける家」としていた。「源氏物語」帚木巻には、左大臣家の人々が紀伊守の中川の邸を方違えなどで気軽に利用していたことから、婿の光源氏に勧める場面がある。勧めに従って急遽中川の邸に方違えした源氏は、そこで紀伊守の継母の空蟬（もとは中納言の娘で、桐壺帝のもとに入内するはずだったが、父に死なれ、紀伊守の父伊予介の後妻となった）と出会うのだが、そこでの源氏の傍若無人のふるまい、接待に駆けずり回る紀伊守の姿は、「御方違所」を提供する諸大夫たちの有様を活写するものだろう。翻って『栄花物語』には、世人は時平の曾孫ともあろう者がと嘆いたとあるが、むべなるかなである。しかしながら道兼は流行中の疫病にかかり、少し持ち直して二条の本邸に戻ったものの、結局兄の死後一ヶ月未満で薨去、失意のなか相如も亡くなったという。余談になるが、この時もしも道兼があと数年長命であれば、清少納言の仕えた中関白家（道隆流）の没落はなかったかもしれない。すなわち、定子は一条天皇の帝寵篤い中宮だったから数年のうちに皇子を生み、死期を悟った道隆によつて強引に内大臣に上り、関白を望む姿勢が周囲の反発を買っていた伊周も、いざれ地位に年齢や人望が追いついて、要はすんなり定子所生の敦康親王の立太子、外戚伊周の政權掌握に至ったのではあるまいか。しかし現実には道兼の

短命のため、再び関白が争われ、結局、数え三十歳だった道隆の弟、大納言道長が内覧の宣旨を受け、右大臣に上った。一方伊周は数え二十二歳とはいえ、既に内大臣で中宮の兄だったのだから無念は深く、憤懣は陣定での口論や下人同士の諍いにとどまらず、花山法皇に矢を射かける軽拳に及んでしまった。もとはといえば、伊周の通い先（大叔父の大納言為光邸）に花山法皇も通っていた（実はそれぞれ別の為光娘に通っていた）のを誤解し、出家の身で女のもとに通う負い目があるから、法皇も表だって非難できまいと高をくくつての、ほんの威嚇のつもりだったようだが、発覚してしまえば不敬罪と言わざるを得ず、伊周・隆家兄弟は訴追され左遷され、定子は抗議をこめて髪を切ったという（長徳の変・九九五年）。のちに許され伊周たちは都に戻り、定子も一条天皇の懇望によつて内裏の職、御曹司に戻り、寵愛を受けて皇子も産んだが、やはり中関白家はかつての輝きを取り戻すことはできず、以後道長が権力を掌握することとなる。

話は逸れたが、道長自身の運命の分水嶺でもあった兄道兼の薨去の折の、いかにも諸大夫層らしい相如の追従と落命は、道長の脳裏にも深く刻み込まれたのではなからうか。「さらざらましかば」相如の人生は、自分たちのものでもあったのだ……。なお、この時道兼と運命を共にした相如の結末は、その九年前、九八六年の

花山天皇出家の際の、花山の乳母子藤原惟成の顛末にも少し似ている。すなわち惟成は、母の養君である花山の御代において、実務面で中心的役割を担って五位撰政と称された（江談抄）が、花山が側近（藏人）の道兼に唆されて出家してしまうと（寛和の変）、潔く花山に殉じて出家した。これと決めた主と命運を共にした点でよく似た二人だが、片や天皇のもとで政治に才を發揮し、片や実権を握る権勢家へつらつて生きた。似て非でもある二人の生き方を考えるにあたり、改めて気になるのが、先の冷泉誕生のとき、「さらざらましかば」誰が皇太子となり、外戚になったと考えていたのか、である。

村上即位（九四六年）の折、村上にも朱雀上皇にも子がなく、皇太子は不在であった。その後九四八年に村上女御安子に産事があったが女子で、やつと九五〇年に出産ラッシュとなった。まず中納言元方の娘の村上更衣祐姫が第一皇子広平親王を産み、続いて朱雀女御熙子女王（慶頼王の妹、保明親王娘）が女子、昌子内親王を産んだ。そして同年の五月に「さらざらましかば」の冷泉が誕生、村上は大層喜び、その命を受けて外祖父師輔たちは先例を慎重に検討して生後二ヶ月で皇太子とした（九曆）。その結果孫の即位が潰えた元方は病死、死後冷泉に憑くもののけとなったという（栄花物語、大鏡）。さてここで注目したいのは、恨み死ぬほどに元方が孫の即位に期待を持った点である。元方は

摂関家と分かれて久しい藤原南家出身、ただの偏屈な思い込みとも思えるが、先の朱雀には親王が誕生せず、皇太子不在のまま十五年目でやつと成明を皇太子に据えた。そして次の村上也親王が誕生せず、皇太子不在のままもはや五年目、この際一刻も早く立太子をとという空気が強かったのかもしれない。もしもこの時冷泉が誕生しなかったら、皇女だったなら、世の空気に抗しきれず、広平が皇太子となり、忠平流は天皇の外戚になり損ねた。まさに「さらさらましかば」の分水嶺だったとは、要するに元方が、帝の外戚にもなり得たということである。

元方の父の菅根は才学の誉れ高く保明親王の東宮亮に拔擢され、参議まで昇進したが数え五十三歳で落雷のため死去、人々はおのが失脚に加担した菅根を恨んだ道真が、怨霊と化して取り殺したと噂したという。元方も大学寮で学び数え五十三歳で公卿となり極官は大納言、元方の子懐忠も数え五十五歳で公卿となり極官は大納言、娘を円融天皇の更衣としている。このように十世紀半ばぐらいまでは、藤原摂関流以外でも政務に深く携わり、時に公卿層まで出世し、娘を後宮に入れて更衣とする例はあったのである。例えば北家魚名流の在衡（祖父は中納言山蔭）は数え五十歳で公卿となり極官は左大臣、娘を村上天皇の更衣とした。在衡の叔父の中正は従四位上で亡くなったが娘は道長らの生母時姫、もう一人の娘は花山天皇の乳母、つまり先

の惟成の母である。また惟成の父は山蔭の兄弟の子孫で、公卿には至らなかったが代々大学寮を経て実務に携わる、学才ある人物であった。

実際には広平は立太子されず、以後も摂関家内の覇権争いが続いた。すなわち、安子は冷泉のほか、為平親王、守平親王と、次々と皇子を産んだが、冷泉には奇矯なふるまいがあったこともあり、今後兄実頼や弟師尹が最大の政敵となる可能性を考え、師輔は一世源氏ながら才学優れた源高明を娘婿に迎えて丁重に遇した。実際師輔は冷泉の即位を待たずに数え五十二歳で亡くなったが、村上天皇は故師輔の心を汲み、為平親王と源高明の娘（生母は師輔三女。俊賢の同母姉）を娶せている。そして村上が崩御し冷泉が即位して皇太子を定める際、源高明の婿である為平ではなく、ずっと年下で元服もまだ先の守平（円融）が皇太子となったのである。さらにその二年後の九六九年には、源満仲の密告により高明に謀反の意ありとされ、高明は左遷されてしまう（安和の変）。『蜻蛉日記』では、「身の上のみする日記には入るまじきことなれども、悲しと思ひ入りしも誰ならねば、記しておくなり」との言い訳とともに、安和の変に言及したほどに、これも衝撃的な出来事であったが、『大鏡』師輔伝によれば、源氏の栄えを危ぶみ「御をぢたちの魂深く、非道に御弟をば引き越し」という。この「をぢ」は為平の伯叔父の意で、伊尹兼家ら兄弟を言うのだろう。

かつての父師輔の深謀はそれとして、無事冷泉が即位し後宮に伊尹娘の懐子が入内している時点で為平立太子となれば、いずれ高明自身が政敵になるので、実頼・師尹に同調し、「をぢ」たちは守平を皇太子に選び、いわば為平たちの梯子を外したのである。背筋が凍るようなすさまじい権力闘争である。この傍らで地道に年功を積んで五十を大きく超えて公卿となり、娘を更衣として入内させても、いったい何になるというのか。「所々の御前・雑役につられ歩」く権勢家の家人となって出世の糸口を掴む方が早道と考えるのもよくわかるが、その最後のダメ押しのような事変が、寛和の変である。

円融を皇太子に据えたあと、伊尹の娘の懐子は冷泉の第一皇子を産み、無事立太子にこぎ着けることができた（花山）。しかしその三年後に伊尹は薨去、伊尹の長男次男も早世という不運にみまわれた結果、やつと花山が即位した時の外戚は、従四位上侍従の義懐しかいなかった。これで一気に昇進しても一年四ヶ月後に従二位権中納言に至るのがせいぜい、大臣などまだまだ先である。孤立無援の義懐は天皇の乳母子の惟成の才学を頼みとし、その周辺の才学ある者も積極的に登用したので、花山朝は「内劣りの外めでた（花山天皇本人には問題があるが、惟成らが実務を担った政治の方は立派だった）」と言われた（大鏡・伊尹伝）。一方義懐らが実績を重ねて人望を集める前に権力を奪還したい兼

家は、一年十ヶ月で花山を退位に追い込み（この時道兼の周りを囲んで、花山の内裏脱出と寺までの護送を務めたのが先の源滿仲だという）、外孫の一条天皇即位を導いた（寛和の変）。諸大夫が政務の中心で輝いた「外めでた」は、結局のところ偶然が重なった僥倖に過ぎず、必然的であつたという間にしぼんでしまう、あだ花でしかなかったのである。その一方で、諸大夫でしかない現実を割り切つて、花山出家をやり遂げた道兼の胆力を見込み、追従を重ねた相如は、賢かつたようではあつたが、結局は運がなく、これまた一時のぬか喜びで消えてしまった。そして、冷泉誕生という強運の子孫である道長は、兄二人や姪の定子の短命、かつ自身の長命と娘たちが親王三人（後一条、後朱雀、後冷泉）を産む強運によつて、みごと数々の分水嶺を乗り越えて、「この世をば」の頂点を極めていった。

清少納言、紫式部の生きた平安中期は、藤原氏の他氏排斥が完了し、かわりに師輔の息子たちと実頼・師尹、早世した伊尹の後を巡る兼通・兼家、同じく早世した道隆・道兼の後を巡る伊周・隆家と道長というように、摂関家内部で熾烈な争いを繰り広げた時代であつた。そしてそれは、天皇のもとで務める遅々とした年功を重ねるよりも、権力者におもねり受領を歴任しようとする諸大夫層が形成されてゆく時代でもあつた。そのなかで清少納言や紫式部は、世をどう受け止めていたのだろうか。

『源氏物語』では、才ある第二皇子であつても、母が更衣であるから当然皇太子になりえず、臣籍降下して光源氏となるものの、兄朱雀帝の外戚右大臣家に圧迫され、源高明のごとく須磨謫居を余儀なくされる——のだが、結局権力を掌握どころか、ただの天皇以上の存在にのぼりつめ、准上天皇となるさまを描いている。その一方で、相如のようにおもねる紀伊守や関屋巻の衛門佐（かつての空蟬の弟、小君）の姿も描いている。自らの生きた時代の、諸大夫層の現実や藤原摂関家の権力闘争をきちんと認識しつつ、相対化する鋭いまなざしを感じざるを得ないのである。思えば紫式部は、曾祖父は紀貫之のパトロンとして名高い中納言兼輔、祖母も醍醐天皇の外叔父である右大臣定方の娘で、父は当代の碩学として名高い為時、花山の学問の師を務め、式部丞六位藏人として花山朝のあだ花に遭遇もした身であつた。紫式部の俯瞰的で鋭いまなざしは、このような生まれや漢学の深い知識を思うと、納得させられるのである。

一方、清少納言の父祖は、九世紀後半以降常に極位が従五位下という典型的中級貴族であり、歌人（深養父、元輔）は出て、才学ある家（文人貴族）ではない。紫式部のように同時代を相対化する〈知〉や自負心がおのずと蓄積される環境ではなさそうである。なるほど『枕草子』では、九八六年から一〇〇〇年までの貴族社会の様相を書いているだけのようにも見える。

とはいえ、任国を巡つて一喜一憂する受領たちを戯画的に描き（すさまじきもの）、帝に親近する「藏人」を繰り返し賛美する一方で、近年の藏人たちが、帝に親近できる榮譽を何とも思わず、一刻も早く従五位下となつて任国を得ようとするさまを嘆いている（めでたきもの）。何といつても、「御前にて、人々とも」段や「殿などのおはしまさで後」段、跋文によれば、長徳の変のころ清少納言は、道長周辺と近ずき古参でない女房として、朋輩たちに疎まれ居づらくなり、長く里に籠もらざるを得なかつたのだが、その間に『枕草子』は書かれ始め、草稿と共にあえて不遇の定子中宮のもとに帰参したらしいのである。出仕前の体験としてあえて寛和の変を取り上げ、どう描いたか（小白川といふところは）、元夫で花山天皇のもう一人の乳母子である橘則光や為光の息子齊信との交流をどう描いたか（頭中将のすずなるそら言を聞きて・返る年の二月二十余日・里にまかだるに）などを読むと、単なる栄華への憧れにとどまらないまなざしを感じずにはいられない。あるいは、定子中宮という得がたい主人に出会つたのち、長徳の変という転落、寿命や出産という人知を超えた偶然によつて引き起こされる事変を、主人の身の上を通じてつづきに味わう体験をしたからこそ、まなざしなのかもしれない。